

Intercultural Collaboration Experiment 2002 (ICE2002) (野村早恵子)

2001 年末、私は当時、博士課程 2 回生で、そろそろ博士論文執筆に向けて焦りを感じ始めているころだった。そんなある日、石田先生から、9・11 事件をきっかけに、インターネットを介した異文化間のコミュニケーションの橋渡しをする研究を始めたいが、一緒にやらないかと声を掛けられた(当時の思いについては同著者別項参照)。

インターネット上での異文化コミュニケーションを支える手段としては、機械翻訳サービスに注目。世界中の言語間の翻訳サービスを徹底的に調べ、翻訳言語間の大きなマトリックスを作った。ヨーロッパ言語間は比較的サービスが充実している。でも、アジアの国々との間のマスは空白が目立った。私たちはアジア人だ。アジアでのインターネットの普及が激化している今、ターゲットをアジアにしようではないか。アジア言語で翻訳技術が使えるものとして注目したのが、日中韓、そして NTT MSC Sdn.Bhd.が開発・運営をしているマレー語だった。早速、当時 NTT MSC の所長をしていらっしやった小寺さんに連絡を取り、マレーシアに飛んだ。この出張には、研究協力大学を探すという目的もあった。

結果的に、ICE2002 には、日中韓マ 4 カ国 5 大学(京大、上海交通大、ソウル大、半ドン大、マラヤ大)から総勢 40 名強の学生と教員が集まった。また、機械翻訳サービスも、Arcnet/Sangenjaya の他に韓国語を得意とする高電社と契約した。

実験での多言語会話の場として、上記 2 社の機械翻訳サービスを組み込んだ TransBBS および TransWeb を開発・参加者に提供した。両ツールの開発には、山本さん(JST)のほか、中塚君や岡本君(現 (株)東芝)や石田研の多くの学生の協力を得た。実験は、2002 年 5 月-7 月と 10 月-12 月の 2 回行われた。実験オーガナイザとしては、山下さんと船越さん(NTT CS 研)、安岡さん(現 東京大学)、私の 4 人体制で臨んだ。アジアのネットワーク事情を鑑み、分散型にした TransBBS の同期がうまく行かず、休日も夜遅くまで各国の学生と電話でやり取りした。TransBBS 自身も実験ごとにアップデートされ、必要な機能がその都度追加された。どう工夫しても翻訳がうまく行かない場合には、韓国からの留学生のチョさん達の協力を得た。膨大な会話ログを解析した結果、ICE2002 は、機械翻訳技術が人々のコラボレーションを支える技術になる見通しを与えてくれた。

実験が進むにつれ、当初懐疑的だった自然言語処理研究者も積極的に議論に参加して下さるようになった。本研究成果が、NTT の小倉さんや林さんなどの協力を得て、自然言語処理の国際会議で発表されたことは特筆に値するだろう。アジア太平洋機械翻訳協会(AAMT)参加の研究者の方々にも、特に機械翻訳技術のメンタルモデル研究などにおいて定期的にご議論いただいている。

ICE2002 が、今後さらに高まる異文化間、多言語間コラボレーションサポートの研究活動に対し、一石を投じたものとなっていることを強く願う。

